校長室だより～燦燦～ №４９５

違和感

2022.1.27

今まで１０回の異動を経験してきている。２～３年での異動が多かった。私の場合は、一つのところに長くいると、だめになりそうな気がするため、それでよかったと思っている。慣れは傲慢に変わるかもしれない。自分の意見が通るようになったら異動の時期だという人もいる。そこまでは考えないが、なるほどと思うところはある。

「異動は最大の研修である」という。膨張しかけた自分を小さくリセットさせるいい機会である。職場がかわりビクビクしながら毎日を過ごすこともある。初めの１か月は必死である。大変ではあるが、全く違う雰囲気の職場で、多くのことを学ぶことができる。職場が変わるということは、自分を一回り大きく成長させる絶好の機会である。

異動した年に「この学校はおかしい」と少なからず不満を漏らす教員がいる。管理職や同僚のこと、学校運営や組織のこと、会議や行事のやり方などである。今までの職場が、実はそれほど良いとは思っていなかった教員ですら、前任校の方が良かったと言ったりする。これは教員特有のことなのかもしれない。順応力、適応力が低いのではなかろうか。

今までと違うという違和感が、不満につながるのかもしれないが、この違和感はある意味、大事な感覚だと思う。違和感は気付きであり、行動の原動力で変革のエネルギーである。ところが、残念ながら１年もすると、何だかその環境にすっかり慣れてしまい、いつの間にか違和感が消え、すっかりなじんでしまう。こうなると、既に変革のエネルギーはついえている。

今は、次年度の教育課程編成の時期である。違和感が尊重されるときである。私とともに今年度赴任してきたメンバーの違和感を学校改革のエネルギーにしたい。とはいえ、その職場で１年も経たない者が、長きにわたりその職場に貢献してきた人たちに、物申すのは難しいであろう。

そこでだが、私が、それぞれの違和感に耳を傾けることはできる。聴いた上で判断すればよい。私の場合はというと、違和感というよりは、１４年ものブランクがあるため、「今どきはどうなの」「相変わらず変わっていないね」などと、確かめながら考えるようにしている。大雑把にいうと、時代の流れに合わせて変わってきている部分と、時代に取り残されたように全く変わっていない部分とがある。これでは、先生方もやりづらいだろうと思うのである。

昔のことだが、異動してきて「〇〇中では、こうだった」と、事あるごとに夏休みぐらいまで言っている方がいた。これは、違和感とは違う。やめたほうがよい。変革のエネルギーとはならない。まわりの人間が気分を害するだけである。他山の石としたい。

文書を点検したり、何か行動したりするときにも違和感を感じることがある。この違和感はというと、１００％あたる。文書ならば、どこかにミスというかズレがある。行動ならば、何かを忘れている。私にとって違和感は大切である。だが、悲しいかな違和感を感じながらも、その要因に気付かずに終わることも出てきた。これが歳なのだろうか。